

# 成績と授業満足度に影響を与えるプロセスの分析 —簿記のオンライン授業を対象にした大学間比較—

手 嶋 竜 二  
金 川 一 夫

## 〔要 旨〕

本研究の目的は、簿記のオンライン授業を対象にして、学生の授業満足度を測定し大学間で比較を行うことで、成績と授業満足度の関連を明らかにし、さらに、成績と授業満足度に影響を与えている要因の因果関係がどのようなものかを明らかにすることである。そのために、簿記のオンライン授業を実施し、その効果をアンケートによって測定し、そして得られたデータにより統計分析を行った。大学ごとに全体データ、オンライン授業の肯定・否定、偏差値上位・下位、授業満足度上位・下位の群別に相関分析を実施し、成績および授業満足度との関連を確認した。また、同様に、提案モデルについて繰り返しの重回帰分析によりパス解析を行った。その結果、KSUの学生は提出意識が高いこと、IPUの学生は資格取得に関する意識が高く、オンライン授業に肯定的な意識をもっていることが判明した。つまり、KSUの学生はオンライン授業の嗜好にかかわらず、提出意識が高いので学生努力により成績を上げることができ、IPUの学生はオンライン授業に肯定的であることにより授業満足度に影響を及ぼしていると示唆された。

## 1. はじめに

### 1.1 背景と目的

わが国では、COVID-19（新型コロナウイルス）の感染拡大の影響を受け、大学ではそれ以前の授業とは一変しほとんどがオンライン授業となった時期もあった（NHK、2020ab）。授業のオンライン化を成功させるためには、実際にオンライン授業を受けている学生がどのような評価をしているかを明らかにする必要がある。そこで、本研究では、簿記のオンライン授業について学生による授業評価アンケートで授業満足度（以下、満足度という）を測定しオンライン授業のもとで成績との関連を明らかにする。さらに、アンケートにより収集されたデータについて、成績および満足度にどのような要因が影響を与えているのか、その因果関係がどのようなものかを検討する。

## 1.2 先行研究

### 1.2.1 学生による授業評価

近年、多くの大学では教育の質向上の取り組みとしてFD (Faculty Development) 活動が行われ、その一環として学生による授業評価アンケートが実施されている。2018年の実施率は99.3%であった(文部科学省、2020)。授業評価アンケートの活用事例について、非常に多くの報告が行われている。

授業評価アンケートの中の質問項目で特に注目されるのは、満足度と考えられる(谷口、2013)。つまり、授業改善の目的は学生の授業に対するニーズを的確にとらえ、授業に対する総合的な満足度を高めることである。そのためには何をすべきであるのかをデータにもとづき客観的・定量的な分析により明らかにすることが重要となる。

例えば、森・田邊(2011)では、基礎ゼミ、英語科目、専門科目の科目種別の授業評価アンケートのデータから、因子分析および重回帰分析を行い総合評価と相関性の高い、つまり総合評価に影響を与えている要因の分析を行っている。星野・牟田(2004; 2005)の一連の研究では、満足度や理解度がどのような因子から影響を及ぼされているかについて共分散構造分析を用いて明らかにしている。谷口(2013)では、授業評価アンケートのデータを用いて、因子分析により潜在変数が観測変数である総合評価への影響を共分散構造分析により明らかにしている。中村・赤倉(2018)では、授業形態ごとの満足度の要因の違いを明らかにするために、学生へ授業評価アンケートを行い、因子分析と共分散構造分析により満足度への影響要因を明にしている。このように成績や満足度がどのような要因(変数)によって影響を受けているかについて明らかにするために、重回帰分析等が用いられパス解析が行われている。

### 1.2.2 簿記の成績を上げる要因

簿記の成績に対してどのような要因が関連し分析されているのだろうか。例えば、海外では属性にもとづくデータにより分析が行われている(Koh and Koh, 1999; Seow et al., 2014)。わが国では、これまでの先行研究において簿記に内在する勘定科目や概念を理解することの難しさを中心に指摘されてきたが、近年においては、属性にもとづき統計的・定量的に分析されている(中村、2015; 山根、2018)。

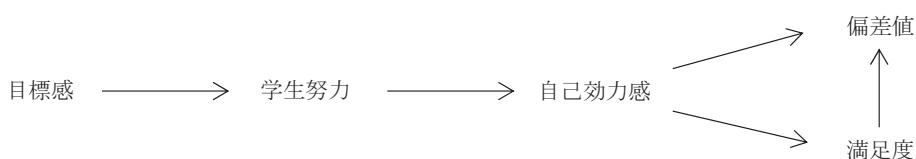
このように簿記の成績に対して教科に内在する難しさや属性といった点について明らかにされてきた。簿記の成績および満足度にどのような要因が関連しているのか、その要因がどのようなプロセスで影響しているのかを明らかにした研究は少ないと思われる<sup>1)</sup>。

## 2. 研究方法

### 2.1 概念モデルの設計

筆者らは、一連の研究（手嶋・金川、2019；2020abc）を踏まえた概念モデルの検証後、成績に影響を与えるプロセスにおける因果関係の概念モデルを提示したが<sup>2)</sup>、授業評価アンケートとの関係から満足度と成績（偏差値）の2つを従属変数とするモデルを図1の通り提案した（手嶋・金川、2021）。

図1 偏差値・満足度の提案モデル



出所：手嶋・金川（2021）、p. 135を一部変更。

偏差値と満足度は、観測変数であり、その他の変数は潜在的な因子である。従属変数である偏差値あるいは満足度に影響を与えるプロセスとしては、「目標感」→「学生努力」→「自己効力感」→「満足度」→「偏差値」、ないし「目標感」→「学生努力」→「自己効力感」→「偏差値」となる。偏差値・満足度の提案モデル（図1）に従い本研究においては次のH01～07までの仮説を設定し、大学別に検証する。

H01：学生努力は、目標感に影響されている。

H02：自己効力感は、学生努力に影響されている。

H03：満足度は、自己効力感に影響されている。

H04：偏差値は、自己効力感に影響されている。

H05：偏差値は、満足度に影響されている。

H06：偏差値は、目標感、学生努力、自己効力感、および満足度に影響されている。

H07：偏差値は、目標感、学生努力、および自己効力感に影響されている。

### 2.2 研究方法

九州産業大学商学部（KSU）および環太平洋大学経営学部（IPU）において、2020年前期に実施された簿記の授業の履修者を対象とし、アンケート調査による効果測定を行った。

KSUにおいて、2020年5～7月に実施された簿記の授業（「簿記論」）の履修者を対象とし、アンケート調査による効果測定を行った。授業は、半期制で1コマ100分の全14回

(オンデマンド型授業)である。最終回に Google Forms を利用し、アンケート調査を実施した。

IPU において、2020年5～7月に実施された簿記の授業(「簿記入門」)の履修者を対象とし、アンケート調査による効果測定を行った。授業は、半期制で1コマ100分の全12回(オンデマンド型授業)+課題2回である。最終回に Google Forms を利用し、アンケート調査を実施した。

収集されたデータにもとづいて統計処理が行われる。本調査では、アンケートで得られたデータより日本人の1年生KSU42名(男性35名(83.3%)、女性7名(16.7%))とIPU54名(男性43名(79.6%)、女性11名(20.4%))を抽出し対象とした。収集されたデータはIBM®SPSS®Statistics ver. 26により統計処理が行われた。なお、アンケート調査を実施するにあたり、各大学の研究倫理規定を遵守している。

### 2.3 質問項目

附表にアンケート調査で実施された質問項目を示した。Q0については、コロナウイルス感染拡大に鑑み、独自の意識調査を行った。Q1については、オンライン授業は好きかどうかを質問した。Q2の授業評価アンケートの項目については、斉田(2012)および谷口(2013)を参考に作成した。そしてQ3-1～Q3-8の簿記の自己効力感についての質問項目は、松沼(2004)を参考に作成した。Q3-9～Q3-13は、オリジナルの質問項目で簿記について技術修得度を尋ねた。Q3-14～Q3-15は、この科目に対しての目標について独自に質問した。すべての質問項目で6件法(質問に対して、「とてもそう思う」は6、「そう思う」5、「少しそう思う」4、「あまりそう思わない」3、「そう思わない」2、「まったくそう思わない」1を選ぶ)により回答を求めた。なお、Q2-18は逆転項目となっている。

## 3. 結果

### 3.1 記述統計量

#### 3.1.1 平均値と標準偏差

質問項目の平均値と標準偏差を表1に示した( $t$ 値については後述する)。それに示される質問項目を見ると、平均値( $M$ )が多少高くなっている項目もみられるが、標準偏差( $SD$ )が広がっていないためにすべての項目を分析の対象とした。また、Q2の10～

14については、大学間で質問項目が異なるので、直接的に比較はできないと判断し、10～12を課題量として、13～14を提出意識として変数を合成した。

### 3.1.2 平均の差の検定 ( $t$ 検定)

質問項目の大学間の比較を行うために、 $t$  検定を実施し、 $t$  値を表1に示した ( $df$  (自由度) = 94、\*.  $p < .05$ 、\*\*.  $p < .01$ )。その結果、提出意識 ( $t = 2.04^*$ ) について IPU より KSU の方が有意に高い得点を示していた。他方、Q 0 - 3 - 1 ( $t = 2.69^{**}$ )、Q 1 ( $t = 2.27^*$ )、Q 2 - 6 ( $t = 2.79^{**}$ )、Q 2 - 9 ( $t = 4.85^{**}$ )、Q 3 - 10 ( $t = 2.34^*$ )、Q 3 - 11 ( $t = 2.12^*$ )、Q 3 - 14 ( $t = 3.58^*$ )、Q 3 - 15 ( $t = 3.45^*$ )、および課題量 ( $t = 2.14^*$ ) につい

表1 記述統計量

No.	KSU $n=42$		IPU $n=54$		$t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
Q0-1-1	3.86	1.39	4.04	1.08	.71
Q0-1-2	3.88	1.45	3.96	1.61	.26
Q0-2-1	2.81	1.35	2.37	1.40	1.55
Q0-2-2	4.52	1.63	4.70	1.69	.53
Q0-3-1	3.52	1.50	4.35	1.49	2.69**
Q0-3-2	4.57	1.68	4.39	1.76	.51
Q1	3.21	1.62	3.89	1.30	2.27*
Q2-1	3.60	1.45	4.04	1.35	1.54
Q2-2	3.95	1.34	4.02	1.34	.24
Q2-3	3.74	1.42	3.85	1.17	.43
Q2-4	3.60	1.52	4.52	1.24	3.28
Q2-5	4.33	1.34	4.81	1.45	1.67
Q2-6	3.69	1.33	4.48	1.41	2.79**
Q2-7	4.00	1.45	3.93	1.52	.24
Q2-8	3.98	1.55	3.59	1.41	1.27
Q2-9	3.67	1.54	5.09	1.34	4.85**
Q2-10	4.36	1.64	5.24	1.33	
Q2-11	4.29	1.60	4.78	1.66	
Q2-12			5.02	1.43	
Q2-13	4.31	1.57	4.78	1.48	
Q2-14	3.52	1.33	3.61	1.48	
Q2-15	3.17	1.17	3.57	1.49	1.46
Q2-16	3.67	1.54	4.15	1.62	1.48
Q2-17	3.33	1.32	3.39	1.53	.19
Q2-18	3.05	1.29	2.48	1.54	1.92
Q2-19	3.57	1.19	3.87	1.26	1.18
Q2-20	3.60	1.19	3.96	1.26	1.45
Q3-1	2.83	1.31	2.83	1.31	.00
Q3-2	3.45	1.06	3.76	1.32	1.23
Q3-3	3.07	1.16	3.04	1.30	.14
Q3-4	3.19	1.13	3.28	1.25	.35
Q3-5	3.05	1.15	3.09	1.23	.18
Q3-6	2.88	1.23	2.72	1.20	.63
Q3-7	3.24	1.12	3.48	1.40	.92
Q3-8	2.95	1.15	3.33	1.55	1.33
Q3-9	3.50	1.21	3.63	1.31	.50
Q3-10	3.33	1.16	3.94	1.35	2.34*
Q3-11	3.17	1.15	3.72	1.37	2.12*
Q3-12	3.10	1.05	3.46	1.28	1.50
Q3-13	3.14	1.12	3.33	1.29	.76
Q3-14	3.98	1.58	5.06	1.37	3.58*
Q3-15	3.86	1.62	4.93	1.41	3.45*
課題量 (合成)	3.67	1.42	4.19	0.95	2.14*
提出意識 (合成)	5.04	1.25	4.45	1.51	2.04*

出所：筆者作成  $n$  = データの個数、 $M$  = 平均値、 $SD$  = 標準偏差、\*.  $p < .05$ 、\*\*.  $p < .01$

ては、KSU より IPU の方が有意に高い得点を示していた。

KSU の学生は提出意識が高く、IPU の学生は資格取得に関する意識（Q 0-3-1、Q 3-14・15）が高く、オンライン授業に肯定的な意識（Q 1、Q 2-6・9）をもっているといえる。

## 3.2 単純集計

### 3.2.1 新型コロナウイルス感染拡大の影響

#### (1) Q 0-1-1、Q 0-1-2

Q 0-1-1「COVID-19感染拡大防止に対応した休講期間中、学修態度に変化があった」かを尋ねた。KSU では、4～6 を選択したポジティブ回答群は、25名（59.5%）であった。1～3 を選択したネガティブ回答群は、17名（40.5%）であった。IPU では、ポジティブ回答群42名（77.7%）、ネガティブ回答群12名（22.3%）であった。

上記質問に対しQ 0-1-2「それはいつ頃からですか?」と尋ねた。時期については、早い時期を数字が大きくなるようにして、6 = 4月上旬、5 = 4月中旬、4 = 4月下旬、3 = 5月上旬、2 = 5月中旬、1 = 5月下旬とした。KSU では、4月までに変化があったと回答した群は25名（59.5%）、5月までに変化があったと回答した群は、17名（40.5%）であった。IPU では、4月群30名（55.5%）、5月群24名（44.5%）であった。

#### (2) Q 0-2-1、Q 0-2-2

Q 0-2-1「COVID-19感染拡大防止の影響で、希望就職先は変化した」かを尋ねた。KSU では、ポジティブ回答群は、12名（28.6%）であった。ネガティブ回答群は、30名（71.4%）であった。IPU では、ポジティブ回答群14名（25.9%）、ネガティブ回答群40名（74.1%）であった。

上記質問に対しQ 0-2-2「それはいつ頃からですか?」と尋ねた。KSU では、4月までに変化があったと回答した群は33名（78.6%）、5月までに変化があったと回答した群は、9名（21.4%）であった。IPU では、4月群40名（74.1%）、5月群14名（25.9%）であった。

#### (3) Q 0-3-1、Q 0-3-2

Q 0-3-1「COVID-19感染拡大防止の影響で、資格取得を真剣に考えている」かを尋ねた。KSU では、ポジティブ回答群は、21名（50.0%）であった。ネガティブ回答群は、

21名 (50.0%) であった。IPU では、ポジティブ回答群43名 (79.6%)、ネガティブ回答群11名 (20.4%) であった。Q 0-3-1 は、上述の 3.1.2 平均の差の検定により  $t=2.69$ 、 $df=94$ 、 $p<.01$  で KSU より IPU の方が有意に高い得点を示していた。

上記質問に対し Q 0-3-2 「それはいつ頃からですか?」 と尋ねた。KSU では、4 月までに変化があったと回答した群は30名 (71.4%)、5 月までに変化があったと回答した群は、12名 (28.6%) であった。IPU では、4 月群37名 (68.5%)、5 月群17名 (31.5%) であった。

### 3.2.2 オンライン授業について

Q 1 「オンライン授業 (遠隔授業、WEB 授業、ハイブリッド型等) について (この科目だけでなく全般的に) オンライン授業は好き」かを尋ねた。KSU では、ポジティブ回答群は、19名 (45.2%) であった。ネガティブ回答群は、23名 (54.8%) であった。IPU では、ポジティブ回答群35名 (64.8%)、ネガティブ回答群19名 (35.2%) であった。Q 1 は、上述の 3.1.2 平均の差の検定により  $t=2.27$ 、 $df=94$ 、 $p<.05$  で KSU より IPU の方が有意に高い得点を示していた。

### 3.3 因子の要約

手嶋・金川 (2021) によれば、先行研究による因子に質問項目を要約することは妥当であると判断される。つまり、Q 2-1 ~ 2-8 は「教員努力」因子 (Q 2-3、2-4 については合成変数の課題量を使用した)、Q 2-9 ~ 2-14 「学生努力」因子 (Q 2-10、11、12 については合成変数の提出意識を使用した)、Q 2-15 ~ 2-17、2-19 「期待感」因子 (手嶋・金川 (2021) の結果を踏まえ Q 2-18 を除外する)、Q 2-20 「満足度」<sup>3)</sup>、Q 3-1 ~ 3-8 「自己効力感」因子、Q 3-9 ~ 3-13 「技術修得」因子、そして Q 3-14 ~ 3-15 「目標感」因子とされる。したがって、これ以降、これらの因子により分析を進めることにする。

### 3.4 相関分析

より詳細な相関分析を行うために属性を分類した。(a) 「Q 1 オンライン授業は好きだ」の質問に対して、6 件法のうち 1 ~ 3 を選択したネガティブ回答群 (以後、否定群と呼ぶ) と 4 ~ 6 を選択したポジティブ回答群 (以後、肯定群と呼ぶ) の 2 群に分類した。

(b) 偏差値を基準にして 50 以上を上位群、50 未満を下位群として分類した。そして、(c)



満足度を「Q 2-20この科目について総合的に満足している」の質問に対して、6件法のうち1～3を選択した下位群と4～6を選択した上位群の2群に分類した。

### 3.4.1 全体データの相互相関

全体データの相互相関について、従属変数である偏差値と満足度に、抽出された6つの因子との相関を分析した（Pearsonの相関係数 $=r$ 、 $^* .p < .05$ 、 $^{**} .p < .01$ ）。その結果、両大学において偏差値と有意になった因子は、認められなかった。満足度については、偏差値を除き、両大学ともにすべての因子で正の関係となり有意となった。自己効力感と目標感の関係（ $r = .26$ ）について、IPUでは有意とはならなかったが、その他の因子については、偏差値を除き、すべての因子で正の関係となり有意になった。

### 3.4.2 Q1肯定群・否定群別の相互相関

モデル（図1）の従属変数である偏差値および満足度と各因子との相関および満足度との相関について、「Q1オンライン授業は好きだ」の質問に対する群別の相関分析を実施した。

#### （1）Q1肯定群の相互相関

分析の結果、偏差値との有意な相関があったのは、KSUでの期待感（ $r = -.52^*$ ）のみで負の関係となった。満足度との相互相関において有意になった相関は、KSUでは教員努力（ $r = .76^{**}$ ）、学生努力（ $r = .56^*$ ）、期待感（ $r = .62^*$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。IPUでは教員努力（ $r = .71^{**}$ ）、期待感（ $r = .76^{**}$ ）、自己効力感（ $r = .77^{**}$ ）、技術修得（ $r = .56^{**}$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。

#### （2）Q1否定群の相互相関

分析の結果、両大学において偏差値と有意になった因子は、認められなかった。満足度との相互相関において有意になった相関は、KSUでは教員努力（ $r = .81^{**}$ ）、学生努力（ $r = .80^{**}$ ）、期待感（ $r = .84^{**}$ ）、自己効力感（ $r = .57^{**}$ ）、技術修得（ $r = .63^{**}$ ）、目標感（ $r = .74^{**}$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。IPUでは教員努力（ $r = .69^{**}$ ）、期待感（ $r = .47^*$ ）、目標感（ $r = .53^*$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。



### 3.4.3 偏差値上位群・下位群別の相互相関

モデル（図1）の従属変数である偏差値および満足度と各因子との相関および満足度との相関について、偏差値上位群・下位群別の相関分析を実施した。群分けに関して、全体のデータについて、偏差値を基準にして50以上を上位群、50未満を下位群として区分した。

#### （1）偏差値上位群

分析の結果、両大学において偏差値と有意になった因子は、認められなかった。満足度との相互相関において有意になった相関は、KSUでは教員努力（ $r=.82^{**}$ ）、学生努力（ $r=.57^{**}$ ）、期待感（ $r=.70^{**}$ ）、目標感（ $r=.52^{**}$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。IPUでは教員努力（ $r=.67^{**}$ ）、期待感（ $r=.66^{**}$ ）、自己効力感（ $r=.75^{**}$ ）、技術修得（ $r=.57^{**}$ ）、目標感（ $r=.39^*$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。

#### （2）偏差値下位群

分析の結果、両大学において偏差値と有意になった因子は、認められなかった。満足度との相互相関において有意になった相関は、KSUでは教員努力（ $r=.89^{**}$ ）、学生努力（ $r=.94^{**}$ ）、期待感（ $r=.92^{**}$ ）、自己効力感（ $r=.70^{**}$ ）、目標感（ $r=.82^{**}$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。IPUでは教員努力（ $r=.73^{**}$ ）、学生努力（ $r=.57^{**}$ ）、期待感（ $r=.77^{**}$ ）、自己効力感（ $r=.65^{**}$ ）、技術修得（ $r=.63^{**}$ ）であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。

### 3.4.4 満足度上位群・下位群別の相互相関

全体のデータについて、満足度「Q2-20この科目について総合的に満足している」の質問に対して、6件法のうち1～3を選択した下位群と4～6を選択した上位群の2群に区分した。群別の相関分析を実施した。

#### （1）満足度上位群

分析の結果、偏差値と有意になった因子は、KSUでのみ満足度（ $r=-.49^*$ ）および目標感（ $r=-.44^*$ ）との関係が認められた。有意となった相関はすべて負の関係であった。満足度との相互相関において有意になった相関は、KSUでは教員努力（ $r=.73^{**}$ ）、学生努力（ $r=.67^{**}$ ）、期待感（ $r=.74^{**}$ ）、自己効力感（ $r=.67^{**}$ ）、技術修得（ $r=.56^{**}$ ）

であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。IPUでは教員努力 ( $r = .58^{**}$ )、学生努力 ( $r = .49^{**}$ )、期待感 ( $r = .43^{**}$ )、自己効力感 ( $r = .36^*$ )であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。

## (2) 満足度下位群

分析の結果、偏差値と有意になった因子は、KSUでは学生努力 ( $r = .61^*$ )との関係が認められた。有意となった相関は正の関係であった。IPUでは技術修得 ( $r = .52^*$ )との関係が認められた。有意となった相関は正の関係であった。満足度との相互相関において有意になった相関は、KSUでは学生努力 ( $r = .57^*$ )、期待感 ( $r = .59^{**}$ )、目標感 ( $r = .64^{**}$ )であった。有意となった相関はすべて正の関係であった。IPUでは満足度と有意になった因子は、認められなかった。

## 3.5 重回帰分析

成績および満足度に影響を与える変数を検討するために、提案モデル(図1)で参考にした中谷(1996)と同様に重回帰分析(強制投入法)の繰り返しによるパス解析(階層的重回帰分析)を行った。対象となる変数は提案モデル(図1)に相応する変数となる成績、満足度、自己効力感、学生努力、および目標感を使用した。

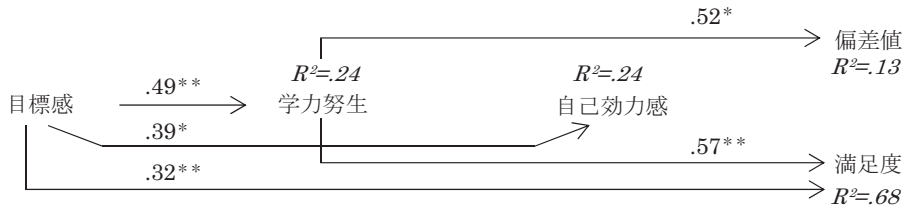
その手続きは、次の(a)～(e)に対して重回帰分析を行う。(a)学生努力を従属変数とし、目標感を独立変数として分析を行う。(b)自己効力感を従属変数とし、目標感と学生努力を独立変数として分析を行う。(c)満足度を従属変数とし、目標感、学生努力、および自己効力感を独立変数として分析を行う。(d)偏差値を従属変数とし、目標感、学生努力、および自己効力感、および満足度を独立変数として分析を行う。そして、(e)偏差値を従属変数とし、目標感、学生努力、および自己効力感を独立変数として分析を行う。分析結果として各図には重決定係数 $R^2$ と標準偏回帰係数 $\beta$ を示した。

### 3.5.1 大学別全体データの重回帰分析

#### ① KSUの場合

大学別の全体データの分析結果を図2に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図2 提案モデルの検討 (大学別全体データ: KSU)



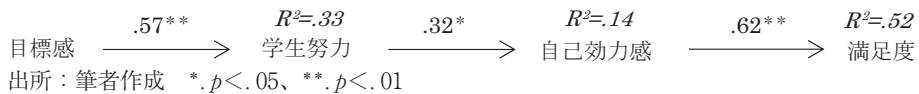
出所：筆者作成 \*. $p < .05$ 、\*\*. $p < .01$

分析の結果、(a) 目標感→学生努力の関係は、有意となった ( $R^2 = .24$ 、 $\beta = .49^{**}$ )。 (b) 目標感→自己効力感の関係において有意となった ( $R^2 = .24$ 、 $\beta = .39^*$ )。学生努力→自己効力感については有意となるパスは存在しなかった。(c) 目標感→満足度 ( $R^2 = .68$ 、 $\beta = .32^{**}$ ) および学生努力→満足度 ( $R^2 = .68$ 、 $\beta = .57^{**}$ ) の関係は、有意となった。自己効力感→満足感については有意となるパスは存在しなかった。(d) 学生努力→偏差値 ( $R^2 = .13$ 、 $\beta = .52^*$ ) の関係は、有意となった。目標感→偏差値、自己効力感→偏差値、および満足度→偏差値については有意となるパスは存在しなかった。そして、(e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

## ② IPU の場合

大学別の全体データの分析結果を図3に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図3 提案モデルの検討 (大学別全体データ: IPU)



分析の結果、(a) 目標感→学生努力の関係は、有意となった ( $R^2 = .33$ 、 $\beta = .57^{**}$ )。 (b) 目標感→自己効力感については有意となるパスは存在しなかった。学生努力→自己効力感の関係において有意となった ( $R^2 = .14$ 、 $\beta = .32^*$ )。 (c) 目標感→満足度および学生努力→満足度については有意となるパスは存在しなかった。自己効力感→満足感の関係は、有意となった ( $R^2 = .52$ 、 $\beta = .62^{**}$ )。 (d) と (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

### 3.5.2 オンライン授業の肯定群・否定群別の検討

全体のデータを質問「Q1 オンライン授業は好きだ」に対して、6件法のうち1～3を選択したオンライン授業否定群と4～6を選択したオンライン授業肯定群の2群に区分し、パス解析を行った。

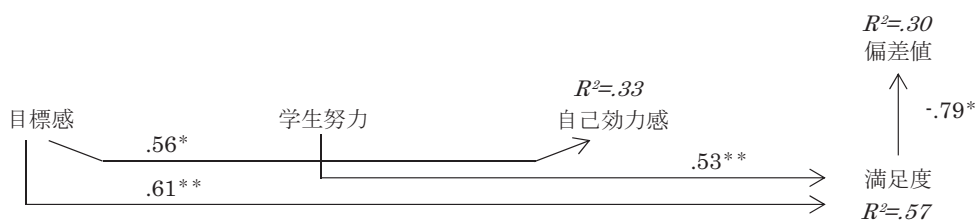
#### (1) オンライン授業肯定群

##### ① KSU の場合

オンライン授業肯定群データの分析結果を図4に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

分析の結果、(a) 目標感→学生努力については有意となる関係が認められなかった。(b) 目標感→自己効力感の関係において有意となった ( $R^2=.33$ ,  $\beta=.56^*$ )。学生努力→自己効力感については有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度 ( $R^2=.57$ ,  $\beta=.61^{**}$ ) および学生努力→満足度 ( $R^2=.57$ ,  $\beta=.53^{**}$ ) の関係は、有意となった。自己効力感→満足感については有意となる関係が認められなかった。(d) 目標感→偏差値、学生努力→偏差値、自己効力感→偏差値については有意となるパスは存在しなかった。満足度→偏差値の関係は、有意となった ( $R^2=.30$ ,  $\beta=-.79^*$ )。そして、(e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

図4 提案モデルの検討 (オンライン授業肯定群: KSU)



出所：筆者作成 \*. $p < .05$ , \*\*. $p < .01$

##### ② IPU の場合

オンライン授業肯定群データの分析結果を図5に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図5 提案モデルの検討（オンライン授業肯定群：IPU）



分析の結果、(a) 目標感→学生努力については有意となった ( $R^2=.32$ ,  $\beta=.57^{**}$ )。 (b) 目標感→自己効力感および学生努力→自己効力感については有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度および学生努力→満足度については、有意となる関係が認められなかった。自己効力感→満足感の関係は、有意となった ( $R^2=.62$ ,  $\beta=.74^{**}$ )。 (d) および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

## (2) オンライン授業否定群

### ① KSU の場合

オンライン授業否定群データの分析結果を図6に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図6 提案モデルの検討（オンライン授業否定群：KSU）

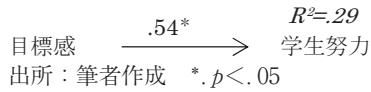


分析の結果、(a) 目標感→学生努力について有意となった ( $R^2=.51$ ,  $\beta=.71^{**}$ )。 (b) 目標感→自己効力感および学生努力→自己効力感については有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度については有意となる関係が認められなかった。学生努力→満足度 ( $R^2=.51$ ,  $\beta=.45^*$ ) の関係は、有意となった。自己効力感→満足感については有意となる関係が認められなかった。(d) および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

### ② IPU の場合

オンライン授業否定群データの分析結果を図7に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図7 提案モデルの検討 (オンライン授業否定群：IPU)



その結果、(a) 目標感→学生努力については有意となった ( $R^2 = .29$ ,  $\beta = .54^*$ )。 (b)、(c)、(d)、および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

### 3.5.3 偏差値上位群・下位群別の検討

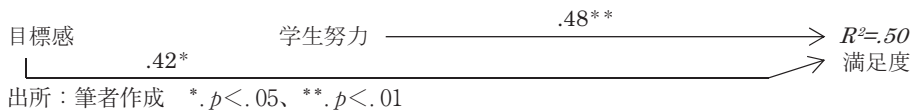
全体のデータについて偏差値が50以上のものを上位群、50未満のものを下位群として提案モデルのパスを検討した。

#### (1) 偏差値上位群

##### ① KSU の場合

偏差値上位群データの分析結果を図8に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図8 提案モデルの検討 (偏差値上位群：KSU)



分析の結果、(a) および (b) について、いずれも有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度 ( $R^2 = .50$ ,  $\beta = .42^*$ ) および学生努力→満足度 ( $R^2 = .50$ ,  $\beta = .48^{**}$ ) の関係は、有意となった。自己効力感→満足感については有意となる関係が認められなかった。(d) および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

##### ② IPU の場合

偏差値上位群データの分析結果を図9に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図9 提案モデルの検討 (偏差値上位群：IPU)



分析の結果、(a) 目標感→学生努力については有意となった ( $R^2=.27$ 、 $\beta=.52^{**}$ )。 (b) については、いずれも有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度および学生努力→満足度については、有意となる関係が認められなかった。自己効力感→満足感の関係は、有意となった ( $R^2=.63$ 、 $\beta=.70^{**}$ )。(d) および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

## (2) 偏差値下位群

### ① KSU の場合

偏差値下位群データの分析結果を図10に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図10 提案モデルの検討 (偏差値下位群：KSU)



分析の結果、(a) 目標感→学生努力について有意となった ( $R^2=.85$ 、 $\beta=.92^{**}$ )。(b) については、いずれも有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度については有意となる関係が認められなかった。学生努力→満足度関係は、有意となった ( $R^2=.90$ 、 $\beta=1.22^{**}$ )。自己効力感→満足感については有意となる関係が認められなかった。(d) および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

### ② IPU の場合

偏差値下位群データの分析結果を図11に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図11 提案モデルの検討 (偏差値下位群：IPU)



分析の結果、(a) 目標感→学生努力 ( $R^2=.47$ 、 $\beta=.69^{**}$ ) については有意となった。(b) については、いずれも有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度および学生努力→満足度については、有意となる関係が認められなかった。自己効力感→満足感の関係は、有意となった ( $R^2=.49$ 、 $\beta=.48^*$ )。(d) および (e) について、い



れも有意となるパスは認められなかった。

### 3.5.4 満足度上位群・下位群別の検討

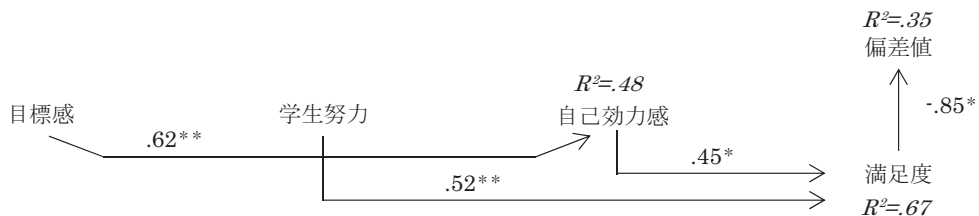
満足度についての質問「Q 2-20この科目について総合的に満足している」に対して、6件法のうち1～3を選択した下位群と4～6を選択した上位群の2群に区分し、パス解析を行った。

#### (1) 満足度上位群

##### ① KSU の場合

満足度上位群データの分析結果を図12に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図12 提案モデルの検討 (満足度上位群：KSU)



出所：筆者作成 \*. $p < .05$ 、\*\*. $p < .01$

分析の結果、(a) 目標感→学生努力については有意となる関係が認められなかった。(b) 目標感→自己効力感の関係において有意となった ( $R^2 = .48$ 、 $\beta = .62^{**}$ )。学生努力→自己効力感については有意となる関係が認められなかった。(c) 目標感→満足度については有意となる関係が認められなかった。学生努力→満足度 ( $R^2 = .67$ 、 $\beta = .52^{**}$ ) の関係は、有意となった。自己効力感→満足感の関係において有意となった ( $R^2 = .67$ 、 $\beta = .45^*$ )。 (d) 目標感→偏差値、学生努力→偏差値、および自己効力感→偏差値については有意となるパスは存在しなかった。満足度→偏差値の関係は、有意となった ( $R^2 = .35$ 、 $\beta = -.85^*$ )。そして、(e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

##### ② IPU の場合

満足度上位群データの分析結果を図13に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図13 提案モデルの検討（満足度上位群：IPU）



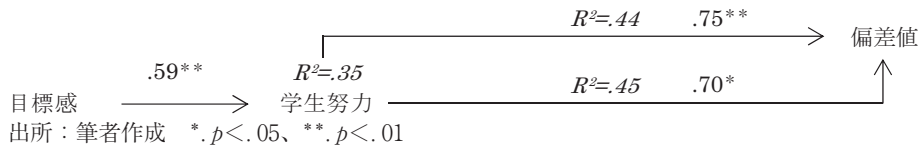
分析の結果、(a)目標感→学生努力について有意となった( $R^2=.44$ 、 $\beta=.66^{**}$ )。(b)については、いずれも有意となる関係が認められなかった。(c)目標感→満足度については有意となる関係が認められなかった。学生努力→満足度 ( $R^2=.29$ 、 $\beta=.47^{**}$ ) の関係は、有意となった。自己効力感→満足感については有意となる関係が認められなかった。(d)および(e)について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

## (2) 満足度下位群

### ① KSU の場合

満足度下位群データの分析結果を図14に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図14 提案モデルの検討（満足度下位群：KSU）

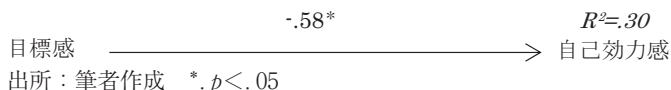


その結果、(a)目標感→学生努力の関係は、有意となった( $R^2=.35$ 、 $\beta=.59^{**}$ )。(b)および(c)についてはいずれも有意となるパスは存在しなかった。(d)学生努力→偏差値の関係は、有意となった ( $R^2=.45$ 、 $\beta=.70^*$ )。目標感→偏差値、自己効力感→偏差値、および満足度→偏差値については有意となるパスは存在しなかった。そして、(e)学生努力→偏差値の関係は、有意となった ( $R^2=.44$ 、 $\beta=.75^{**}$ )。目標感→偏差値、および自己効力感→偏差値については有意となるパスは存在しなかった。

### ② IPU の場合

満足度下位群データの分析結果を図15に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図15 提案モデルの検討（満足度下位群：IPU）



分析の結果、(a) 目標感→学生努力については有意となる関係が認められなかった。(b) 目標感→自己効力感については有意となった ( $R^2 = .30$ ,  $\beta = -.58^*$ )。学生努力→自己効力感については有意となる関係が認められなかった。(c)、(d)、および (e) について、いずれも有意となるパスは認められなかった。

#### 4. 考察

本研究の目的は、大学間で比較を行うことで簿記のオンライン授業を対象にした学生による授業評価アンケートで満足度を測定し、それと偏差値やその他の要因との関係を明らかにすることであった。偏差値・満足度の提案モデル（図1）に従い本研究においては次のH01～07までの仮説を設定していた。したがって、上述の3. 結果を踏まえて仮説を検証する。

##### 4.1 仮説の検証

H01：学生努力は、目標感に影響される。

検証：全体データにおいて、相関分析ではKSU ( $r = .49^{**}$ )、IPU ( $r = .57^{**}$ )、重回帰分析ではKSU ( $R^2 = .24$ ,  $\beta = .49^{**}$ )、IPU ( $R^2 = .33$ ,  $\beta = .57^{**}$ ) となり統計的に有意となる関係が認められた。属性の群別にみると相関分析では、オンライン授業肯定群 IPU ( $r = .57^{**}$ )、オンライン授業否定群 KSU ( $r = .71^{**}$ )、IPU ( $r = .54^*$ )、偏差値上位群 IPU ( $r = .52^{**}$ )、偏差値下位群 KSU ( $r = .92^{**}$ )、IPU ( $r = .69^{**}$ )、満足度上位群 IPU ( $r = .66^{**}$ )、満足度下位群 KSU ( $r = .59^{**}$ ) において統計的に有意となる関係が認められた。重回帰分析では、オンライン授業肯定群 IPU ( $R^2 = .32$ ,  $\beta = .57^{**}$ )、オンライン授業否定群 KSU ( $R^2 = .51$ ,  $\beta = .71^{**}$ )、IPU ( $R^2 = .29$ ,  $\beta = .54^*$ )、偏差値上位群 IPU ( $R^2 = .27$ ,  $\beta = .52^{**}$ )、偏差値下位群 KSU ( $R^2 = .85$ ,  $\beta = .92^{**}$ )、IPU ( $R^2 = .47$ ,  $\beta = .69^{**}$ )、満足度上位群 IPU ( $R^2 = .44$ ,  $\beta = .66^{**}$ )、満足度下位群 KSU ( $R^2 = .35$ ,  $\beta = .59^{**}$ ) において統計的に有意となる関係が認められた。

H02：自己効力感は、学生努力に影響される。

検証：全体データにおいて、相関分析ではKSU ( $r = .35^*$ )、IPU ( $r = .37^{**}$ )、重回帰分析ではIPU ( $R^2 = .14$ 、 $\beta = .32^*$ )において統計的に有意な関係が認められた。属性の群別にみると相関分析では、オンライン授業否定群KSU ( $r = .49^*$ )、偏差値下位群KSU ( $r = .74^{**}$ )、IPU ( $r = .55^*$ )において統計的に有意な関係が認められた。重回帰分析では、いずれも有意となる関係は認められなかった。この仮説が支持されなかったことによりH06とH07の仮説が支持されなくなった。学生努力と自己効力感に因果関係が認められず、自己効力感が何から影響されているのか再検討する必要がある。

H03：満足度は、自己効力感に影響されている。

検証：全体データにおいて、相関分析ではKSU ( $r = .44^{**}$ )、IPU ( $r = .69^{**}$ )、重回帰分析ではIPU ( $R^2 = .52$ 、 $\beta = .62^{**}$ )において統計的に有意となる関係が認められた。属性の群別にみると相関分析では、オンライン授業肯定群IPU ( $r = .77^{**}$ )、オンライン授業否定群KSU ( $r = .57^{**}$ )、偏差値上位群IPU ( $r = .75^{**}$ )、偏差値下位群KSU ( $r = .70^{**}$ )、IPU ( $r = .65^{**}$ )、満足度上位群KSU ( $r = .67^{**}$ )、IPU ( $r = .36^*$ )において統計的に有意となる関係が認められた。重回帰分析では、オンライン授業肯定群IPU ( $R^2 = .62$ 、 $\beta = .74^{**}$ )、偏差値上位群IPU ( $R^2 = .63$ 、 $\beta = .70^{**}$ )、偏差値下位群IPU ( $R^2 = .49$ 、 $\beta = .48^*$ )、満足度上位群KSU ( $R^2 = .67$ 、 $\beta = .45^*$ )において統計的に有意となる関係が認められた。自己効力感を高めることが満足度を高めることが部分的に確かめられた。KSUよりもIPUにおいてその傾向が見られる。

H04：偏差値は、自己効力感に影響されている。

検証：全体および属性の群別のデータにおいても両大学ともに相関分析・回帰分析ともに統計的に有意となる関係は確認されなかった。本研究ではいずれも仮説が支持されることはなかった。しかし、Gutiérrez et.al (2019)によれば、成績が自己効力感をはじめとする認知および感情的な関わり (emotional engagement) の効果により説明されている。手嶋・金川 (2020a；2021)においても偏差値 (成績) は自己効力感に影響を受けていることを実証している。この仮説については、引き続き検討が繰り返される必要がある。

H05：偏差値は、満足度に影響されている。

検証：全体データにおいて両大学ともに相関分析・回帰分析ともに統計的に有意となる

関係は確認されなかった。属性の群別にみると、相関分析では満足度上位群 KSU ( $r = -.49^*$ ) で統計的に有意となる関係が認められた。重回帰分析では、KSU でオンライン授業肯定群 ( $R^2 = .30$ ,  $\beta = -.79^*$ )、満足度上位群 ( $R^2 = .35$ ,  $\beta = -.85^*$ ) で統計的に有意となる因果関係が認められた。IPU においては有意となる関係は認められず、満足度を高めると偏差値 (成績) が上がるということは言えないことが判明した。KSU においても関係が認められたが、いずれも負の関係で満足度を高めることで偏差値が下がることが判明した。満足度を高めることと偏差値を高めることは異なる次元の課題であることが示唆された。

H06: 偏差値は、目標感、学生努力、自己効力感、および満足度に影響されている。

検証: 仮説 H02~05 の検証結果を踏まえて、因子が連続してすべて統計的に有意となるパスが認められることはなかった。重回帰分析では KSU でのオンライン授業肯定群 (目標感・学生努力→満足度→偏差値)、満足度上位群 (目標感→自己効力感→満足度→偏差値) において満足度を経由して偏差値に影響するプロセスになった。満足度→偏差値という一見正しそうなパスも部分的にしか支持されなかった。

H07: 偏差値は、目標感、学生努力、および自己効力感に影響されている。

検証: 仮説 H02~05 の検証結果を踏まえて、因子が連続してすべて統計的に有意となるパスが認められることはなかった。重回帰分析で連続して有意となるパスが見られたのは、KSU での全体データおよび満足度下位群で目標感→学生努力→偏差値のプロセスであった。ただし、目標感からスタートし自己効力感を経由することなかった。すなわち、H04 の仮説の課題と同様になる。

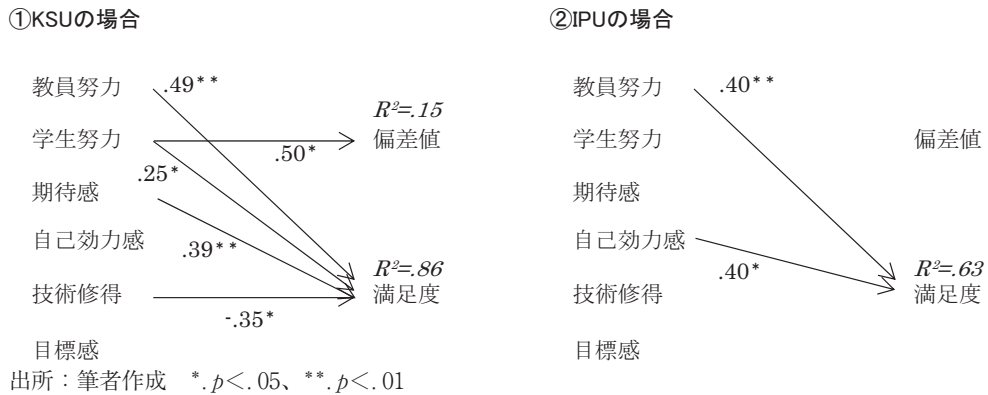
手嶋・金川 (2021) における単回帰分析によるパス解析によれば、仮説 H06 と H07 が支持されたが、本研究における階層的重回帰分析においては支持されなかった。また、本研究では要約した因子すべてをモデルに設定することはなかったため、仮説で使用した因子との関係を探求する必要がある。そこで、モデルをさらに探求するために、偏差値と満足度を従属変数とする重回帰分析を行う。

#### 4.2 さらに検討

満足度および偏差値を従属変数として、すべての因子を独立変数として重回帰分析を実

施した。その結果を図16に示した。なお、有意となったパスのみを示している。

図16 偏差値・満足度とその他因子の検討



KSUの場合、従属変数である満足度 ( $R^2 = .86$ ) と有意な関係になった独立変数は、教員努力 ( $\beta = .49^{**}$ )、学生努力 ( $\beta = .25^*$ )、期待感 ( $\beta = .39^{**}$ )、技術修得 ( $\beta = -.35^*$ )であった。また、偏差値と有意な関係になった独立変数は、学生努力 ( $\beta = .50^*$ )であった。

IPUの場合、従属変数である満足度 ( $R^2 = .63$ ) と有意な関係になった独立変数は、教員努力 ( $\beta = .40^{**}$ )、自己効力感 ( $\beta = .40^*$ )であった。また、偏差値と有意な関係になった独立変数はなかった。

偏差値に影響を与えているのは、KSUの学生努力のみである。偏差値(成績)に影響を与える変数を探求する必要がある。例えば、川島他(2011)では、毎日の生活習慣や人間関係のあり方が学力に影響することを明らかにしている。学修意欲や学修態度自体を問題視するよりも、生活習慣や子供との関わり方を見直すことが学力向上のきっかけとなる可能性を示唆されている<sup>4)</sup>。

## 5. おわりに

本研究の目的は、大学間で比較を行うことにより、簿記のオンライン授業を対象にして学生の授業評価アンケートにより授業満足度を測定し、それがどのように成績(偏差値)と関連しているのかを明らかにすることであった。さらに、成績と授業満足度に影響を与えている要因の因果関係がどのようなものかを明らかにすることであった。その結果、KSUの学生は課題などの提出意識が高く、IPUの学生は資格取得に関する意識(Q0-3

- 1、Q 3-14・15)が高く、オンライン授業に肯定的な意識(Q 1、Q 2-6・9)をもっていることが判明した。

つまり、KSUの学生はオンライン授業の嗜好にかかわらず、課題などの提出意識が高いので学生努力により成績を上げることができた。IPUの学生はオンライン授業に肯定的であることにより、満足度に影響を及ぼしている。肯定群は学生努力が伴わなくても、授業動画により満足している可能性がある。否定群はオンライン授業、つまり授業動画に否定的であるため満足度や偏差値に影響を及ぼさないと考えられる。本研究の成果は、満足度を高める変数と成績(偏差値)を高める変数は同一であると考えてはならないことが判明したことである。

今後の課題として、設定される従属変数には、さまざまな独立変数とプロセスを検討する必要がある。究明するモデルには変数は多数存在し、複数の因果関係や相関関係が想定されるだろう<sup>5)</sup>。

#### 注

- 1) 最近では、李・金川(2020)の研究がある。
- 2) 中谷(1996)では、児童を対象として学業的目標がどのようなプロセスを経て成績に影響するのかを重回帰分析を用いて検討し、学業熟達目標→学業熟達の行動→教科学習への関心・意欲→学業成績という関係を明らかにした。
- 3) 谷口(2013)では、授業評価アンケートの意味合いから授業満足度を高めるような授業改善を目指すため、本質問項目を独立させた。
- 4) 手嶋・金川(2020d)において、生活習慣と簿記の学力(日商簿記検定3級合格)との関係について言及している。
- 5) 齊田(2012)では、英語教育において授業評価アンケートを用いて成績および授業満足度について共分散構造分析を行っている。

#### 参考文献

- Gutiérrez, Melchor and José M. Tomás (2019), "The Role of Perceived Autonomy Support in Predicting University Students' Academic Success Mediated by Academic Self-Efficacy and School Engagement", *Educational Psychology*, (39)6, pp.729-748.
- 星野敦子・牟田博光(2004)「大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因」『日本教育工学会論文誌』(27) suppl, pp. 213-216。
- 星野敦子・牟田博光(2005)「大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係」『日本教育工学会論文誌』(29) 4、pp. 463-473。



- Koh, Moy Yin. and Hian Chye Koh (1999), "The determinants of performance in an accountancy degree programme", *Accounting Education*, (8) 1, pp.13-29.
- 松沼光泰 (2004) 「テスト不安、自己効力感、自己調整学習及びテストパフォーマンスの関連性－小学校4年生と算数のテストを対象として－」『教育心理学研究』(52) 4、pp. 426-436。
- 文部科学省 (2020) 「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」 <[https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt\\_daigakuc03-000010276\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf)>2020年12月2日アクセス。
- 森節子・田邊義隆 (2010) 「授業評価アンケート調査から読み取れる学生の意識と授業の課題－近畿大学法学部における現状分析」『近畿大学法学』(58) 2・3、pp. 721-742。
- 中村英敏 (2015) 「簿記の成績に影響を与える要因の分析：各教科の得意度・出席状況・性別等と成績に関する調査 (第30回全国大会)」『日本簿記学会年報』(30)、pp. 75-83。
- 中村修也・赤倉貴子 (2018) 「授業形態ごとの満足度の要因分析」『日本教育工学会論文誌』(42)、pp. 165-168。
- 中谷素之 (1996) 「児童の社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス」『教育心理学研究』(44) 4、pp. 389-399。
- NHK (2020a) 「新型コロナ 世界15億人超の子どもたちが学校通えず (2020年4月4日)」 <<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200404/k10012367921000.html>>2020年11月13日アクセス。
- NHK (2020b) 「特設サイト新型コロナウイルス>時系列ニュース」 <<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/chronology/>>2020年12月3日アクセス。
- 李瓊球・金川一夫 (2020) 「日韓会計学教育において授業の影響要因が授業満足度と授業成果に及ぼす影響に関する研究」『韓日経商論集』(87)、pp. 23-47。
- 齊田智里 (2012) 「授業満足度と成績に影響を及ぼす授業評価要因の検討：大学英語教育プログラム改善の観点から」『全国英語教育学会紀要』(23)、pp. 389-403。
- Seow, Poh-Sun., Gary Pan, and Joanne Tay (2014), "Revisiting the Determinants of Students' Performance in an Undergraduate Accountancy Degree Programme in Singapore", *Global Perspectives on Accounting Education*, (11), pp.1-23.
- 谷口るり子 (2013) 「授業評価アンケートを用いた授業の総合評価に影響する要因の分析」『日本教育工学会論文誌』(37) 2、pp. 145-152。
- 手嶋竜二・金川一夫 (2019) 「簿記の授業における集中力維持に関する研究：「電卓演習」導入の効果測定について」『商経論叢』(59) 4、pp. 43-59。
- 手嶋竜二・金川一夫 (2020a) 「習熟度別クラス編成に関する研究－環太平洋大学「簿記演習」におけるクラス別要因分析－」『環太平洋大学研究紀要』(16)、pp. 89-96。
- 手嶋竜二・金川一夫 (2020b) 「簿記の成績に影響を与える要因の探索的研究－初学者を対象とした大学間の分析－」『商経論叢』(61) 2、pp. 1-10。
- 手嶋竜二・金川一夫 (2020c) 「簿記の成績に影響を与えるプロセスの分析－日本人と留学生との比較－」『環太平洋大学研究紀要』(17)、pp. 77-85。
- 手嶋竜二・金川一夫 (2020d) 「日商簿記検定の合格判別に関する予備的研究－生活習慣および学修習慣のアンケートを用いて－」『環太平洋大学研究紀要』(15)、pp. 93-101。
- 手嶋竜二・金川一夫 (2021) 「成績と授業満足度に影響を与える要因の研究－簿記のオンライン授業を対象にして－」『環太平洋大学研究紀要』(18)、pp. 133-142。
- 山根陽一 (2018) 「簿記初学者の特性に関する関連性分析－学力指標と学修達成度の関連を中心として－」『簿記研究』(1) 1、pp. 31-41。
- 川島隆太他 (2011) 「学修意欲の科学的研究に関するプロジェクト平成23年度リーフレット」仙台市 HP <<http://www.city.sendai.jp/manabi/kurashi/manabu/kyoiku/inkai/kanren/kyoiku/project.html>>2019年8月9日アクセス。

## 附表 質問項目

No.	KSU	IPU
Q0-1-1	COVID-19 感染拡大防止に対応した休講期間中、学修態度に変化はあった。	
Q0-1-2	それはいつ頃からですか？	
Q0-2-1	COVID-19 感染拡大防止の影響で、希望就職先は変化した。	
Q0-2-2	それはいつ頃からですか？	
Q0-3-1	COVID-19 感染拡大防止の影響で、資格取得を真剣に考えている。	
Q0-3-2	それはいつ頃からですか？	
Q1	オンライン授業（遠隔授業、WEB 授業、ハイブリッド型等）について（この科目だけでなく全般的に）オンライン授業は好きだ。	
Q2-1	教員の説明はわかりやすかった。	
Q2-2	1回の授業の量はちょうどよかった。	
Q2-3	1回のレポートの量はちょうどよかった。	1回の事前課題の量はちょうどよかった。
Q2-4	1回の小テストの量はちょうどよかった。	1回の意見交換の量はちょうどよかった。
Q2-5	教科書は適切だった。	
Q2-6	授業動画は見やすかった。	
Q2-7	授業のペースはちょうどよかった。	
Q2-8	授業の難易度は適切だった。	
Q2-9	授業動画を毎回見ている。	
Q2-10	レポートを毎回提出していた。	事前課題を毎回提出していた。
Q2-11	小テストを毎回提出していた。	意見交換を毎回行っていた。
Q2-12	—	確認テストを毎回提出していた。
Q2-13	レポート・小テストの提出期限を守ることができた。	課題などの提出期限を守ることができた。
Q2-14	レポート・小テスト以外にも予習や復習を行った。	確認テストや課題以外にも予習や復習を行った。
Q2-15	この授業を楽しみにしていた。	
Q2-16	この科目をさらに勉強したいと思う。	
Q2-17	この科目を他の学生に薦めたいと思う。	
Q2-18	この科目は単位のためだけに履修した。	
Q2-19	この科目を理解することができた。	
Q2-20	この科目について総合的に満足している。	
Q3-1	簿記が得意である。	
Q3-2	この授業で説明されたことはわかる。	
Q3-3	この授業でよい成績が取れると思う。	
Q3-4	簿記の授業で与えられた問題を正解することができる。	
Q3-5	簿記の学修内容についてたくさんを知っていると思う。	
Q3-6	簿記の学力は優れていると思う。	
Q3-7	簿記の学習内容を学ぶことができると思う。	
Q3-8	簿記の勉強のやり方を知っていると思う。	
Q3-9	だいたい仕訳ができる。	
Q3-10	仕訳→T字勘定に転記ができる。	
Q3-11	試算表の作成ができる。	
Q3-12	決算整理仕訳を行うことができる。	
Q3-13	精算表の作成ができる。	
Q3-14	この科目は将来役に立つと思う。	
Q3-15	簿記の資格を取得したい。	

出所：筆者作成